



曳山 花山



家庭でのもてなし



曳山 提灯山



築山飾

放生津八幡宮秋季大祭の現状と課題

Current status and issues of the Hojozu Hachiman Shrine's regular autumn Festivals

人文科学系／伝統研究／論文

地域キュレーションコース

榎 玲奈 Rena Maki

◎研究目的

本論文では、放生津八幡宮秋季大祭の現状と課題と題して、近年感じられる新湊曳山まつりや、築山行事・宵祭り、祭礼中の家庭の様子の変化から現状を見つめ、課題である点を探し、解決の一提案を行うことをテーマに論じていく。

放生津八幡宮秋季大祭は9月30日から10月3日までの4日間にわたり行われる放生津八幡宮の行事である。9月30日に魂迎式、築山祭、前夜祭、入魂式、10月1日に神輿渡御、曳山巡行、10月2日に例大祭、放生会式、築山飾、10月3日に報賽祭が執り行われる。

◎現状

新湊曳山祭りにおいては、曳山まつりを神事としてではなくイベントとして捉えて参加している者がいることや、巡行に観光的配慮がなされていること、曳山や衣装の装飾化から、元来神賑行事であった曳山巡行のイベント化が進んでいる。

放生津八幡宮で行われている行事から宵祭りや築山行事を取り上げる。9月30日の夕刻を指す宵祭りでは観光客向けのアトラクションを用意している曳山町によって秋季大祭への高まりを演出するも、祭りの雰囲気演出に効果が期待できる提灯は高齢化により設置が減っている。築山祭と築山飾を総称した築山行事は、2020年に国の重要無形民俗文化財に登録された。築山飾は氏子の参詣参拝が求められるが、氏子の興味関心が薄く足を運ぶ人が少ない。

祭礼日変更当時の大正11(1922)年には親戚を呼びもてなしていたというのが最近の町の様子として親戚を呼んでいる家庭は少ない。また、家で作っていた御膳を仕出しでまかなうようになっていたが、店に入る注文の大半も現在はオールドブルになったという。最も多く聞かれたもてなし喪失の原因はもてなす側の高齢化と、親戚付き合いの減少であった。

◎課題

新湊曳山祭りは国指定重要無形民俗文化財に登録されたことを踏まえてイベント化を是正し、神様の存在が消えたただのイベントとならないようブレーキをかけていくことが今後必要となる。

宵祭りの今後として、提灯によって氏子、アトラクションによって観光客の双方に秋季大祭を感じてもらおうといった役割を担っていくことを期待し、地域を巻き込んだ雰囲気づくりが課題であり、築山行事は氏子に行事の存在や概要を知ってもらい、神様と氏子が交歓する場の創出が求められている。

各家庭のしきたりは社会の変化によって失われていったものであるため、時代に逆らって過去の様子に戻すことを無理に強いることではない。しかし、用意していた料理の記憶や親戚同士が集まっていた様子を過去の記録でとどめないための工夫と、家庭の味というものが失われないための工夫が必要であることが課題としてあげられる。それに加え、しきたりが変化したことにより影響を受けている地域の飲食店の祭礼時の営業を見直し、観光客が秋季大祭と同時に近年観光地となった新湊を楽しんでもらい、秋季大祭を活用して商工を活性化させることも今後考えてまちづくりがなされることを期待する。